「クリーンミート」は革命を起こすか

友人Ｉ氏からメールで、ポール・シャピロ著『クリーンミート～培養肉が世界を変える～』（日経ＢＰ）を読んで、その読後感を本コーナーに書いて知らせろ、との有難い連絡▼クリーンミートとは、動物の筋細胞を採取して生体外で培養される人工肉をいう。本書は、このクリーンミートを巡る研究・開発の進展により、商業ベースでの製造・販売は「叫べば届くところまで来ている」とする。そして多くの投資家たちが投資機会を狙って活発に動き始めていることを詳細にレポートしている▼シャピロは動物愛護運動のリーダーであるが、世界的ベストセラーとなった『サピエンス全史』の著者ユヴァル・ノア・ハラリが寄せた序文でまず、本書が衝撃的な問題提起の書であることを示唆する。そしてズバリ、クリーンミートの登場は「私たちの食料生産方法に、約１万年前の農業革命以来、最大の変革が起きるだろう。」と予言する▼その背景にあるのが、現在の舎飼い、穀物飼料供給による畜産＝工業的畜産の持続性喪失だ。工業的畜産は、１）著しい動物への虐待、２）人口増・所得増にともなう食料需給ひっ迫、３）大量の温室効果ガスの排出、４）排泄物による土壌や水質汚染、５）抗生物質とワクチン使用による汚染、６）高い伝染病リスク、等数多くの問題点を抱えていることを厳しく指摘する。そしてこれをクリアできるのが「細胞農業」によるクリーンミートだとする▼商業販売までにはさらなるコスト引き下げと消費者の支持獲得が大きな課題となる。特に消費者が人工肉・培養肉を普通に食べるようになるかは疑問だが、多くの問題を抱えている工業的畜産が現在の食生活を支えていることを頭で十分理解するかどうかがカギを握るのではないか。そして畜産業界が本腰を入れて構造的な問題に対処していくかどうかが、これを左右するように思う。

（土着菌）